

## きょうだい関係とは何か

—個別性と関係性を探る—

磯 崎 三喜年

## はじめに

きょうだい関係は、子どもの個と関係性を育むうえで重要なものと言える。子どもの個は、子どもを取り巻く他者、とりわけ親、きょうだい、友人など心理的に近い他者との関わりの中で育まれる。そうした関わりの中でこそ、人は個としてのありよう、つまり自己定義 (self-definition) を形作る。ここでの自己定義とは、自己という存在をどう規定し、どういった志向性を持ち、どう社会と関わるかについての意識の総体である。自己定義は、一方で主体的な個としての側面を持ちつつ、他方で他者からの影響を受けつつ形作られる相互作用的で関係性的な個としての側面を持つ。

年齢段階の低い幼児期は主として親が、そして小学生から中学生段階になると、親との関わりから友人やきょうだい、そしてより広範囲な他者との関わりへとその重みが増してくる。さらに高校生から大学生になると、対人関係の広がりとともに、より内面的で深い友人関係やきょうだい関係が形成され、そうした関係性が自己定義に及ぼすインパクトも大きくなる。

かつて文豪夏目漱石は、大学で建築学を学ぼうとしたが、それを聞いた畏友米山保三郎は、漱石の才能を見抜き、文学への道を強く勧め、その結果漱石は英文学の道へ進むことになる。きょうだい間においても、中学2年以下で史上初のプロ棋士となった谷川浩司名人は、兄との「闘い」の中で、その才能を伸ばしていった。逆に言えば、谷川名人の兄は、弟の存在ゆえに、それとは異なる道へと進んだという。

そもそもきょうだいの研究は、その取り上げる視点によってさまざまな様相を見せ、それを規定する要因も多様である。したがって、きょうだい研究は、明確な結論を導くことが難しいとの指摘もある。何より、きょうだい関係はあまりに自明なものであり、研究対象として取り上げにくい面もあるかもしれない。

しかし、研究の蓄積は着実になされてきている。ただし、研究成果とそのインプリケーションをよそに、今日では、マス・コミと社会の関心とが響きあう形で、きょうだい関係は、相互にメリットをもたらすものとしての「資源」と、葛藤と憎悪をもたらす「リスク」という両義性の狭間で揺れている。きょうだい関係の本質的な側面よりも、こうした「資源」と「リスク」の側面が、いわば肥大化した形で取り上げられている。学問的な視点から、きょうだい関係について検討し、子どもの個と関係性について考察するゆえんである。

きょうだいの存在の有無は、すぐれて今日的な課題である。また、子どもの個と関係性を考えるにあたっては、きょうだい関係とともに、友人関係についても触れる必要がある。そもそも、きょうだい関係と友人関係は、相互にどういった関係にあり、その異同の本質は何かについても検討を加えたい。

きょうだい関係の研究は、心理学、教育学、社会学、保育学など、さまざまな学問と接点を持ち、その接合領域の問題として捉えることができる。学際性と独自性を追求する子ども社会学会の特色を生かし、多様な視点からきょうだい関係とは何かを追究・展望し、きょうだい関係について議論を深めたい。それが、本テーマセッションの狙いである。

企画は、伊藤秀樹氏（東京学芸大学）と筆者によるものであり、司会も両名により行われた。そして、社会心理学・きょうだい心理学、教育社会学の立場からの話題提供と、多分野にまたがるフロアの方々との討論を通して、「きょうだい関係とは何か」について議論が展開された。以下その概要を述べることにする。

## 「子どもの個と関係性 —きょうだい・友人関係の視点から—」

この報告（第一報告）は筆者（磯崎）によってなされた。親やきょうだい相

互の関わり、出生順位効果、きょうだい存在の有無などの視点から、子どもの個と関係性について考察がなされた。また、きょうだいと友人との異同は何かについてデータに基づき議論が提起された。

まず指摘できる点は、親およびきょうだいといった心理的に近い他者との相互関連とその影響の大きさである。そうした前提のもと、出生順位効果が取り上げられた(磯崎, 2016 参照)。第一子の出生は、親にとって最初の子であり、初心者としての子育てとなる。緊張と期待の大きさから、子どもへの関心、注意度も高い。マニュアルや身近な他者に頼りながらの慎重な子育てとなる。こうした親の関わり方は、第一子に反映すると考えられる。

親の関わりの強さは、第一子の知的側面に有利に作用し、親や周囲の他者に共有されている社会的価値を内面化しやすい。実際、第一子は、知的レベルや達成意欲が高い傾向を示し、成績も優れている。宇宙飛行士が第一子に多いのはその典型であり、社会的に高い地位を獲得しやすい。

知的能力は、きょうだい数が多くなるほど、そして第一子以降になるにつれ下がっていく。きょうだい数が増えると、知的な存在である親との相互作用が、下のきょうだいになるほど低下しがちであることがその一因と考えられる。

ひとりっ子も、第一子同様、親の関心と注目そして親との相互作用に恵まれ、高い知的能力を示すが、第一子ほどではない。第一子は、下のきょうだいを教えるなどの経験を通して知的能力と学習スキルを伸ばしやすいことが関わっていると思われる。

生活面においては、第一子は、長寿の傾向がある。これは、親からの資源を得やすいこと、下のきょうだいより優位な位置を獲得しやすいこと、などが関連している。また、社会的価値を意識し、慎重で安定した仕事に就く傾向があることも長寿につながりやすい。第一子が長寿なのは、特に男性同士のきょうだいであり、女性同士ではそれほど強くはみられない。女性きょうだい同士は、成人後もつながり意識が強く、親和的な関係を維持しやすい。男性は、成人後、きょうだい間接触は低下しがちで、サポートの授受も少ない可能性がある。

中間子についてはどうか。かつての日本に比べると、きょうだい数そして中間子が減少している。中間子は、親も第一子での子育てで経験を活かし、緊張感も低下した子育てが可能となる。そうした慣れの感覚は、中間子や末っ子の伸

びやかさ、独立性に影響すると考えられる。

中間子は、上と下のきょうだいと関わり、年上と年下双方の経験をしながら育つ。こうした経験は、中間子の柔軟さや平等意識を育て、調整的な視点を持ちやすい。歴史上の人物として浅井長政の三姉妹の中間子、初が、豊臣方に嫁いだ茶々、徳川方に嫁いだ江の間に入って優れた調整力を発揮したことはよく知られている。また、革命などの変革期においても、中間子は、苛烈な手段に訴えることは少なく、穏健なリーダーとしてその手腕を発揮している。公民権運動で知られるアメリカのキング牧師は、そうした人物の典型と言える。また、パーソナリティ検査としてよく知られる Big5 尺度を用いた研究では、中間子は調和性 (agreeableness) が高いとされる。これは、人当たりのよさがその特徴であり、上述した役割行動と符合している。

末っ子は、決断が早く、リスクを厭わない傾向がある。スポーツの世界で活躍するトップアスリートには末っ子が多い。日本プロ野球の代表的ホームランバッター、サッカーの日本代表にも末っ子が多い。アメリカ大リーグのきょうだいで在籍した選手を見ても、下のきょうだいの方が好成績を残している。また、下のきょうだいほど、アレルギー体質にはなりにくく、きょうだい数の多さは、離婚率を下げることも知られている。

知的な側面では、下のきょうだいが不利とされるが、末っ子は上のきょうだいを見ながら、ときに模倣し、ときに教わりながら、要領のよさを発揮し、自己定義を形作っていく。親や上のきょうだいの注意や関心を引きつけ、戦略的に自己を活かす術を身につけていく。結果として、上のきょうだいとは異なる特徴 (自己定義) を身につけていく。その意味で、末っ子は、上のきょうだいとの棲み分けを意識しやすいと思われる。

ひとりっ子であるが、その知的側面についてはすでに触れた。きょうだいがいないため、親の関心が集中し、資源を十分利用できる。また、きょうだい間の比較や葛藤を経験することもなく、自信を持ちやすい。関心を持った事ごとに躊躇なく打ち込める。親との関係や、親に対する意識は強くなりがちであるが、決断も早く、リスクをそれほど回避しない。

ひとりっ子は、かつては第一子に近い存在と見なされたことがあるが、むしろ末っ子に近い側面があるように思われる。ただし、きょうだいがいないと、

同年代や近い年代の他者とのやりとりが少なくなり、社会的スキルに欠ける面もある。その意味では、きょうだいの存在は、対人関係のいざごごへの対応、同年代の他者とのやり取りをスムーズにさせているかもしれない。

こうした点が、ひとりっ子ときょうだいのいる人の意識の違いに反映してくる。例えば、ひとりっ子が、ひとりっ子であることを肯定する度合いは、きょうだいのいる人が、きょうだいの存在を肯定する度合いには及ばない(磯崎・ナルデッチ, 2012)。つまり、たとえきょうだい間で葛藤やいざごごを経験しつつも、きょうだいのいる人は、そのよさを感じていると言える。

では、きょうだい関係と友人関係の異同についてはどうだろうか。きょうだいと友人に対する捉え方や好意度を示した筆者のデータによると、きょうだいへの好意的感情、誇りに思う気持ちは、中学生段階では低く、高校生や大学生になって、次第に肯定的なものとなる。これに対し、友人に対しては、中学生段階からすでに肯定的であり、高校生から大学生になるとさらに強まる。相談する度合いも、友人の方がきょうだいよりも高い。

このように、きょうだい関係は、年齢が低い段階では親密さが感じられず、むしろ関係の難しさをうかがわせる。きょうだいは、所与の関係にあり、小さい頃からともに育つ存在ではあるが、年齢差やそれに伴う身体的・心理的な違い、優劣や上下などタテの関係も入りやすい。こうした要因が、競争や葛藤を生みやすい一方、家庭内で一緒にいることが多く、近さの調整は容易ではない。したがって、親密さはそれほど感じない可能性がある。これに対し、友人関係は選択的な関係であり、年齢の低い段階で互いに心地よい関係を形成しうる相手を選ぶことができる。近さや関係の調整も比較的容易である。こうした違いが、きょうだいと友人に対する捉え方の差を生み出していると思われる。

## 「Birth Order Differences in Self-Evaluation Maintenance Model (自己評価維持モデルの出生順による違い)」

この報告(第二報告)は、Aung Ko Ko Lynn氏(国際基督教大学大学院)により英語で行われ、筆者が日本語で適宜解説を加えた。Lynn氏が取り上げたのは、きょうだいおよび友人という心理的に近い他者の達成が、自己の評価に

どのような影響をもたらすかに着目した実証的研究である。これは、自己評価維持 (self-evaluation maintenance: SEM) モデル (Tesser, 1984) に基づく研究で、日本とミャンマーの大学生を対象としている。

SEM モデルとは、人は、自己評価を維持しようとするとの基本的前提のもと、心理的に近い他者の優れた達成によって、個人の自己評価が上がったり、下がったりする心理的な動きを説明するモデルである。例えば、自分のきょうだいや友人 (心理的な近さ) が、スポーツや学業で優れた達成 (達成度) を遂げたとき、そうした他者とつながりのある自己を心地よく感じ、自己評価が上げる場合がそれにあたる。こうした自己評価が上がる過程を反映過程 (reflection process) と呼ぶ。

それに対し、同じようにきょうだいや友人が、優れた達成を遂げたとき、自己が脅威を感じたり自己の劣位を意識することによって、自己評価が下がる場合がある。こうした過程を比較過程 (comparison process) と呼ぶ。なぜ、同一の2つの要因 (心理的な近さと達成度) によって相反する過程が生じるのか。モデルによれば、それを決定するのが、関与度 (relevance) である。関与度とは、自己定義に関わる度合いであり、関与度が高いほど、自己にとって重要であり、自己を規定することになる。関与度が高い場合、近い他者の達成が自己を上回るほど、自己は脅かされ比較過程が生じやすくなる。つまり、自己評価は低下する。逆に、関与度が低い場合、近い他者の達成は喜びや誇りとなる。つまり、自己評価は上がる。

したがって、人は自己評価維持のために、関与度の高い活動では自己の達成を心理的に近い他者より高く (評価) して比較過程を回避するが、関与度の低い活動では心理的に近い他者の達成を自己の達成より高く (評価) して反映過程を生起させようとする。これが、自己評価維持の心理機制である。ここでは、この心理機制が、きょうだいと友人の双方に対して成り立つか、また、きょうだいの出生順によってはどうかについて、大学生を対象に検討した。

その結果、そうした自己評価維持機制が、大学生のきょうだい関係において明確に示された。これは、小・中学生段階では見られなかった結果である。小・中学生段階では、きょうだい間の力関係や優劣が一方的なものとなりがちで、自己評価維持が成り立ちにくい。つまり、きょうだい間では、自己評価維持に

きょうだい関係とは何か  
—個別性と関係性を探る—

よるバランスが取りにくいことを示している。それが、大学生になると、きょうだい双方が心理的に成長し、一方的な力関係・優劣が解消されて、結果としてそれぞれの持ち味を出しやすく、また感じやすくなって、自己評価維持が可能になったと推測される。また、友人関係は、予測どおり小・中学生や高校生で見られたと同様、明確な自己評価維持が示された。この結果の持つ意味は大きい。

第一報告に見られるように、きょうだい関係は、小学生・中学生といった年齢段階では、必ずしもポジティブな関係ではない。これは、友人関係におけるポジティブさと対照的であり、きょうだいの存在は、友人関係ほどポジティブには捉えられていない。データの的には、きょうだいの存在がポジティブとなるのは、女子では中学から高校生、男子では高校生から大学生である。ここに選択的・水平的関係の友人関係とななめ的關係のきょうだい関係の違いが現れている。

出生順位別にみると、第一子、末っ子、ひとりっ子は、いずれも SEM モデルに合致した結果となっている。つまり、自己評価維持のため、比較過程を回避し、反映過程が生起している。ただし中間子のみ、異なるパターンを示した。中間子は、自己にとって関与度の高いことがらにおいても、自己ときょうだいの評定に差が見られず、きょうだいを自己と同様高く評価している。このように、中間子は反映過程は見られるものの、比較過程を回避する傾向は明確ではない。

換言すれば、中間子は自己ときょうだいの差異性を明確にせず、同化的・融和的な傾向が強い。この特徴は、中間子が、調和性が高く人当たりがよいことと符合する。中間子以外は、関与度の高いことがらで、自己の優位性を表明し、自他の差異性を明確にしている。興味深いことに、この中間子の特徴は、友人関係においてもあてはまる。つまり、中間子は、関与度の高いことがらにおいても自己と友人を同様に高く評定し、比較過程を明確には回避していない。友人関係においても、中間子は同化的・融和的傾向を示している。

このように、中間子は、友人関係、きょうだい関係いずれにおいても融和的傾向があり、調和性の高さを示唆している。

## 第一報告と第二報告を合わせて

自己評価維持の心理機制は、友人関係については、小学生 3,4 年生からすでに見られ（磯崎, 1994）、小学校高学年、中学生でも成り立つ（磯崎・高橋, 1988, 1993）。高校生（Isozaki & Pierce, 2013）や大学生（Isozaki & Lynn, 2018）でも同様にあてはまる。

友人関係における自己評価維持の成立は、友人との関係を肯定しその維持に役立つ。つまり、友人への好意度も高く、その存在を誇りに思っている。翻って、それは自己の肯定につながる。

これに対し、きょうだい間で自己評価維持が成り立つかは、これまで大きな検討課題であった。Tesser(1980)の研究では、男子でのみ、しかもかなり限定的な形で、自己評価維持が認められたにすぎない。筆者らの研究でも、小学生、中学生段階では、自己評価維持が成立しにくいことが確認されている。そして、この年齢段階では、きょうだい間の肯定意識も低い。ところが、大学生になると、きょうだい間で自己評価維持が可能となる（Isozaki & Lynn, 2018）。それに伴って、きょうだいの存在を肯定しやすくなる。つまり、きょうだい関係のポジティブさは、自己評価維持の成立と密接に関連している。

モデルに即して言えば、友人関係は、関与度と達成度のバランスが取りやすく、そのことが心理的近さを容易にしている。関与度と達成度のバランスが取りにくいきょうだい関係は、それが心理的近さに影響を与えている可能性がある。成長とともに、きょうだい間で関与度と達成度のバランスが取りやすくなり、きょうだいのよさを感じ取れるようになる。つまり、心理的近さにも好影響を与えると言える。ここに、きょうだい関係と友人関係の違いを垣間見ることができると言える。

## 「進路選択ときょうだい —教育社会学の視点から—」

この報告（第三報告）は、伊藤秀樹氏によるものである。

これまで、心理学がきょうだい関係について多様な角度からアプローチを行ってきているのに対し、社会学（教育社会学・家族社会学）ではきょうだい



関係について、主に計量研究によって、教育達成の観点から検討が進められてきた。計量研究における教育達成は、どれだけ高い学歴を取得できるかといった教育年数を変数とすることが多い。そして、こうした研究では、生得的要因であるきょうだい数や出生順位、性別によって教育達成の格差が生じているという不平等の構造を明らかにしてきた。

先行研究では、例えば、資源希釈仮説 (Blake, 1989) による説明がある。これは、きょうだい数が多いほど、子ども一人あたりに配分される親からの資源 (資金・時間・注意など) が少なくなるため、教育達成が低くなるというものである。日本でも、きょうだい数が多い人ほど教育達成が低いことがほぼ一貫して示されており (近藤 1996; 平沢 2011 など)、きょうだい数が多い子どもほど教育投資 (=経済的資源) が得られない傾向にある (片瀬・平沢 2008; 苫米地 2017)。

また、選択的投資仮説 (Becker 1981) は、親たちは、資源の制約があるなかで、選択的かつ戦略的に子どもに資源配分を行っているとしている。その際に親たちは、子どもの出生順位や性別を指標として選択的かつ戦略的に投資を行うことになる。日本でも、出生順位については、少なくとも 1955 年以降に生まれた人については、出生順位が遅い人の方が教育達成が低い傾向にある (藤原 2012)。このように、出生順位が遅い人の方が教育投資 (=経済的資源) が得られない傾向にある (苫米地 2017 など) など、出生順位による選択的投資仮説を支持する知見も得られている。

さらに、日本では、同じきょうだいの中でも、女性は男性に比べて教育達成が低い傾向にあり (平尾 2006; 苫米地 2015 など)、女性は男性に比べて教育投資が得られない傾向にある (苫米地 2017)。これは、性別による選択的投資仮説を支持する結果である。もちろん、きょうだいの影響力は家庭背景によって違いがあり、きょうだい数や出生順位が教育達成に与える負の影響は、世帯収入が高ければ緩和される (藤原 2012; 苫米地ほか 2012)。また、女性であることが教育達成に与える負の影響は、父親の学歴が高い場合には若干緩和される (平尾 2006)。

概して、日本の家族は教育費用を負担できさえすれば、一人ひとりのきょうだいを平等に扱ってきたといえる。しかし、経済的な制約が大きければ、家族

はきょうだいを不平等に扱う「不平等化装置」となってしまう（藤原 2012）。

ただし、こうした研究は、その多くが不平等の主たる要因として、いわば「親決定論」に陥っており、子ども自身が能動的に進路選択をするという視点が欠けていた。そこで、新たな視点として、子どもの能動的な進路選択の可能性を検討してみたい。その背景となる考え方は、解釈的アプローチ（稲垣 1990; 片岡 2018）に基づくものである。このアプローチは、人々の行為はあらかじめ社会構造によって決定されているわけではなく、個人の主体性を重視し、行為者間の相互作用とその解釈（意味づけ）を通じて、社会秩序が作られていくという視点に立つものである。なお、解釈的アプローチの中にはシンボリック相互作用論、現象学的社会学、エスノメソドロジーなどが含まれる。

こうした視点に立って、本報告では、子どもたちが能動的に進路選択を行う過程で、きょうだいの存在は、子どもたちの意味づけを通して進路選択にどのような影響を与えているのかを明らかにしようとした。方法は、首都圏にある高等専修学校の生徒（伊藤, 2017 参照）を対象としたインタビューデータの二次分析による。その分析に基づき、解釈的アプローチの有効性を検証するとともに、新たな仮説を提示したい。ただし、データ・手法上の限界があるため、本報告の主眼はあくまでアプローチの有効性と仮説の提案にある。

分析の対象としたのは、健常生徒 29 名（2005 年 11 月～2011 年 7 月実施）。3 年生 19 名（男子 16 名、女性 3 名）、2 年生 10 名（男子 6 名、女子 4 名）であった。

その結果、進路選択についての語りに出てくるパターンには、以下の 3 つがあった。

①「やりたいこと」を生み出す存在としてのきょうだい。これは、例えば、下のきょうだいの世話をするなかで、保育の仕事が「やりたいこと」になったなどの語りである。

②進路を〈なぞる〉存在としてのきょうだい。これには、きょうだいが四年制大学に通う様子を見て、自らも大学進学という進路をなぞっている（ロールモデル効果）という語りや、きょうだいの「失敗」をもとに、あえて進路をなぞらないケース（「なぞる」の反例）などがある。

③進路を〈ゆずる〉存在としてのきょうだい。これは、きょうだいが四年制大学や専門学校への進学を希望しているのを見て、自らは上級学校への進学と

いう進路をきょうだいにゆずっているなどの語りにみられる。その背景には、家庭の経済的事情への配慮がある。

したがって、子どもにとってきょうだいは、親から提供される資源を希釈し、進路選択を制約するものとして存在しているだけではない。きょうだいは子ども自身の意味づけの中で、進路選択を方向づけたり、制約したりするものとしても存在している。つまり、「やりたいこと」の発見による方向づけ、進路を〈なぞる〉ことによる方向づけ／制約、進路を〈ゆずる〉ことによる制約などである。したがって、家庭の経済的背景は親からの資源配分だけでなく、子どものきょうだいへの意味づけにも影響する。

先行研究では、経済的制約が大きい家庭で、きょうだい数や出生順位、性別の影響によって教育達成が低くなる人々がいることを示してきた。しかし、親の選択的投資によって教育達成上の不利を受けているのではなく、本人が親からの投資を自発的に辞退するという立場にある可能性も示唆される。これを、選択的投資仮説に対し、投資辞退仮説と呼ぶことにしたい。もちろん、今回の報告の主眼は、あくまできょうだい研究の新しいアプローチの提案であり、今後、上記の課題を精査していくことで、進路指導・キャリア教育に資する知見や、教育達成の格差を縮めるための知見が提供できるかもしれない。

これらの報告後、フロアとの活発な議論がなされ、きょうだい関係研究の今後の展開と、より焦点化すべき要因や変数の抽出にも注意を向けるべきことなどが提起された。

#### 文献

Becker, G. S. (1981). *A treatise on the family*. Harvard University Press.

Blake, J. (1989). *Family size and achievement*. University of California Press.

藤原翔 (2012). 「きょうだい構成と地位達成——きょうだいデータに対するマルチレベル分析による検討」『ソシオロジ』57, 41-57.

平尾桂子 (2006). 「教育達成ときょうだい構成——性別間格差を中心に」澤口恵一・神原文子編『第2回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第2次報告書 No.2: 親子、きょうだい、サポートネッ

- トワーク』日本家族社会学会全国家族調査委員会, 17-27.
- 平沢和司 (2011). 「きょうだい構成が教育達成に与える影響について——NFRJ08 本人データときょうだいデータを用いて」 稲葉昭英・安田時男編『第3回家族についての全国調査 (NFRJ08) 第2次報告書 第4巻 階層・ネットワーク』日本家族社会学会全国家族調査委員会, 21-43.
- 稲垣恭子 (1990). 「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性——教育的言説と権力の分析に向けて」『教育社会学研究』47, 66-75.
- 磯崎三喜年 (1994). 児童・生徒の自己評価維持機制的発達の变化と抑うつとの関連について 『心理学研究』65, 130-137.
- 磯崎三喜年 (2016). きょうだい関係の意味するもの 『子ども社会研究』22, 177-189.
- Isozaki, M., & Lynn, A. K. K. (2018). Self-evaluation maintenance processes in sibling relationships and birth order effect on friend relationships. *Educational Studies*, 60, 53-60.
- 磯崎三喜年・ナルデッチ, M. (2012). きょうだいの有無によるきょうだい意識と友人関係の違い 『教育研究』54, 113-120.
- Isozaki, M., & Pierce, N. (2013). Self-evaluation maintenance among high school students in Japan. *Educational Studies*, 55, 63-70.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1988). 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 『心理学研究』59, 113-119.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1993). 友人選択と学業成績の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 『心理学研究』63, 371-378.
- 伊藤秀樹 (2017). 『高等専修学校における適応と進路——後期中等教育のセーフティネット』東信堂.
- 片岡栄美 (2018). 「教育研究におけるマイクロレベルとマクロレベル」日本教育社会学会編 『教育社会学事典』丸善出版, 30-31.
- 片瀬一男・平沢和司 (2008). 「少子化と教育投資・教育達成」『教育社会学研究』82, 43-59.
- 近藤博之 (1996). 「地位達成と家族——キョウダイの教育達成を中心に」『家族社会学研究』8, 19-31.
- Tesser, A. (1980). Self-esteem maintenance in family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 77-91.
- Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In Masters, J. C. & Yarkin-Levin, K. (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York: Academic Press. pp.271-299.
- 苔米地なつ帆 (2015). 「教育達成における性別間格差——家族環境ときょうだい構成が与える影響」『社会学研究』95, 101-123.
- 苔米地なつ帆 (2017). 「家族内資源分配に対する出生順位・性別の影響」『社会学研究』99, 11-36.
- 苔米地なつ帆・三輪哲・石田賢示 (2012). 「家族内不平等の再検討——きょうだい構成に着目して」『社会学研究』90, 97-118.